

健康維持には「触媒物質」が不可欠

芍薬の話が指標成分の

ベオニフロリンからノーベル化学賞のクロスカップリング：触媒の話になりました。

水素と酸素の混合物は常温では反応しません。でも白金黒が存在すれば爆発的に化合します。この場合は、酸と白金黒が触媒となります。

人の体温は正常時で三十六℃前後であり、風邪などに対抗する場合でもせいぜい四十℃です。この温度で、なおかつ大気圧と比較しても極端に変わらない圧力下において、代謝や免疫、神経やホルモンによる情報伝達が行われるためには、触媒が欠かせません。

その触媒となるものは、食事や薬物として外部より取り入れられているのは明らかです。人は健康に生きるために、「触媒」となるものを他の栄養素と同じく、生ある限り限り続けなければなりません。

不足すれば欠乏症となり、当然、健康を損ねることになります。

「触媒物質」は有機低分子ミネラル

この「触媒」となるものには、有機低分子のミネラル（鉍物）が関係している場合が多いと考えられます。

触媒ですだから、微量でもよいのです。ところがその微量で足りる量ですら、得てして、尿や汗、大便、場合によっては伸びた髪の毛や爪、皮膚の垢となって、失われていきます。

したがって、やはり、僅かであっても、必要に応じて食事または薬として、この触媒は補わなければならぬのです。

私が考えるに、漢方の隠れた「効き目の根源の一つ」が、この触媒となるミネラル：低分子の有機ミネラルではないでし

ようか。

なお、意外に思われるかも知れませんが、我々の身体のコントロールは、必要な時に必要なだけの内分泌系（ホルモン）や自律神経系の指示と、遺伝子、DNAの指示によって合成されるタンパク質により行われているので、「補欠選手」として待機中の余剰物質は、つくっては壊され、つくっては壊されが繰り返されています。

漢方薬で注目される炭：「黒焼き」

漢方薬の服用は、煎じてのもの、粉末のまま、あるいはその粉末を蜂蜜で固めた丸薬として行われる「炭」が一般的ですが、「炭」即ち「黒焼き」にして服用する方法もあります。

黒焼きを「霜（そう）」と言います。サルの頭をそのまま黒焼きにした「猿頭霜（えんとうそう）」はこれまで、頭痛のほか脳の病、鬱病、婦人病に用いられて来ました。

効果がよく知られている「黒焼き」には、「伯州散（はくしゅうさん）」があります。外科の医者が暇になるほどに刀の傷や金創に良く効いたので、別名「外科倒し」とも呼ばれました。

漢方「炭剤」には「活性炭＋アルファ」

内側に膿を持つ化膿性疾患に「伯州散」は、「千金内托散（せんきんないたくさん）」と併用され、膿が押し出されて患部をきれいにするのに用いられたりしてきました。



漢方の大家は、今日現在においても、この「伯州散」を必要に応じて用いています。

現代医学が、殺菌・消毒により感染症の原因菌をたたき除くのにに対し、基本的に漢方医学は、自然治癒力、自己修復力の増強による治癒、回復を目指します。

現代の科学の方法では、自然治癒を促進しても評価がなかなか出来ません。ですから漢方に対する正当な評価が得にくいので、しょうが、しかし私は、いざれ正しく評価される日が必ず来ると信じています。

「炭」と「灰」は月とスッポンの違い

「炭」と「灰」は漢字で書けば、「山」が有るか無いかですが、化学物質と

勧めて失敗少ない「柴胡桂枝湯」その4

なにわの漢方薬3代目主人

連載49

して考えると、月とスッポン、エコと地球温暖化ほどの差があります。「炭」は炭素の結合が残ったものです。「灰」は、炭素が酸素と結合して二酸化炭素になったあとの燃えカスです。

「灰」は燃えカスですから燃えませんが、「炭」は炭素の固まりですから、酸素との結合がまだ可能で、エネルギー源として活用出来ます。現代医学が、殺菌・消毒により感染症の原因菌をたたき除くのにに対し、基本的に漢方医学は、自然治癒力、自己修復力の増強による治癒、回復を目指します。

大手ゼネコンの大林組は現在、高さ六三四メートルの「東京スカイツリー」の建設プロジェクトで脚光を浴びていますが、富山（富山市松浦町）に

漢方の「炭」は単なる活性炭ではない

私がここで何を強調したいかと申しますと、先ずは、無酸素状態で蒸し焼きにする「炭化」と、酸素と結合させて燃やして「灰」にすることが、いかに違うかということです。

その次には、「炭」は活性炭としての吸着作用が知られていますが、漢方の「黒焼き」には「活性炭+ α （アルファ）」の「プラス・アルファ」が存在することです。

「炭」と言えば、備長炭あるいは『ノンスメル』や『キムコ』のような活性炭としての吸着作用が思い浮かびます。活性炭としての働きは、「炭」の重要な働きの一つであることは間違いないと思います。

漢方は活性炭吸着作用に「アルファ

とところで、医薬品の外用液剤の原料水には、蒸留水ではなく、イオン交換、紫外線照射、活性炭

吸着、ろ過の工程を経た水が使用されます。このとき、大きな物は、ろ過によって取り除かれますが、小さい物を取り除くには、活性炭による吸着が利用されるのです。

酸やアルカリは、プラス、マイナスに帯電しているのので、陰極、陽極のイオン交換樹脂と結合します。

紫外線照射をするのは、殺菌消毒成分が残留菌（細菌・真菌・ウイルス）により有効性を減殺されるからです。

水の浄化においては、分子量の小さい微小物質は、活性炭による吸着によって除去出来ますので、体内においても、尿毒素成分のアンモニアや、下痢を引き起こす大腸菌の除去を行う医薬品として活性炭は活用されています。

日本では木炭をつくる副産物の殺菌消毒成分のクレオソートが「正露丸」の主成分として用いられています。ヨーロッパでは、「CARBO」とい

う名前の炭が、下痢止めの医薬品、整腸薬・下痢止めとして用いられています。下痢を引き起こす大腸菌を「炭」が吸着してくれて効くのです。

慢性腎不全用剤「クレメジン」はどうか

日本での「医薬品としての炭」には、「クレラック」の（株）クレハが製造し、第一三共が販売元となっている慢性腎不全用剤「クレメジン」があります。

慢性腎不全の人の尿毒素成分を下げることを目的とした球状の活性炭です。石油からつくられ、一日分の保険薬価がおよそ千二百円という結構、高い値段がついています。

副作用として「便秘すること」が記載されています。これは、一回二グラムを一日三回で、計六グラムもの「炭」を服用することで大腸菌を吸着することにより、便が出にくくなることによるものと考えられます。

とところで、もしも、漢方の「黒焼き」……「霜（そ

う）」と言われるものが、単なる活性炭の働きだけを期待するものであるなら、「黒焼き」の原料となる生薬は一種類で充分なはずですが。

「黒焼き」の中には、怪しげな「イモリの黒焼き」といったものもあります。が、「黒焼き」と言っても、原材料を使い分けしてきた漢方の歴史的経緯から考えると、それぞれの「黒焼き」にそれぞれ固有の働きがあることが容易に推察されます。

その「固有の働き」とは何かを考えたときに、私は、炭化の温度にヒントが隠されているように考えます。

高い温度で炭化するのにか、低い温度で炭化するのかが、それぞれの場合の差が何であるのかが重要なのです。

ここに漢方の「黒焼き」が、単なる活性炭ではない、「 α （アルファ）」の存在の秘密が隠されているのです。

（永井達夫Ⅱ東洋漢方製薬（株）相談役）